

人参養栄湯を使いこなす ④

じつは高齢者のフレイルには八味丸(八味地黄丸)のほうが適切ではないのか？



入江漢方内科クリニック吉祥寺 入江 祥史

漢方をかじったことのある人ならば、「老化には八味丸(八味地黄丸)」という「常識」が脳裏に浮かぶだろう(以下「八味丸」で通す)。

あの徳川家康(1543~1615年)は満73歳で病没したそうだが、現在でいえば100歳を超える長寿だったともいわれている。しかも戦国の世に生き、生きるか死ぬかという生半可でないストレスにほぼ一生晒されていたのだから、歴史のいたずらがなかったならばもっと長生きしていたのかもしれない。

その家康は、当時でおそらく国内最高レベルの薬の知識を持っており、戦場でさえも自ら薬の調合などをやって服用していたらしい。彼は八味丸をベースに補腎薬を数種類(杜仲、牛膝、肉蓯蓉、巴戟天、菟絲子、海狗腎など)加えて作られた「無比山薬丸(無比山薬円)」を常用していたといわれる。これが「丈夫で長生き」の秘訣だったのかもしれない。

なんだ、それなら高齢者には人参養栄湯なんかよりも八味丸のほうがいいんじゃないか！といわれても仕方がないが、そこはそれ、人参養栄湯の“居場所”はちゃんとあるのだ。

両者の構成生薬を表にしてみると次のようになる。

処方	配合生薬 (g, 1日相当量)	主な効能
人参養栄湯	当帰4・芍薬2・地黄4・茯苓4・白朮4・人参3・黄耆1.5・甘草1・桂皮2.5・陳皮2・五味子1・遠志2	補血・補気・祛痰・安神
八味丸	地黄8・牡丹皮3・山茱萸4・山薬4・沢瀉3・茯苓3・桂皮1・附子(炮附子)1	補腎陰・補肝・補腎・利水・補陽

注意すべき点は、人参養栄湯は煎じ薬であり、エキス製剤はこれをさらに加工して作成したものであるのに対し、八味丸は附子を除いては生(非加熱)の生薬を用いている点である。生のほうが揮発成分などをそのまま備えており、これを蜂蜜で固めてある。

人参養栄湯と八味丸の作用を比較すると、次のようになるだろう。

- ① 補血作用、補気作用は人参養栄湯のほうが強い
- ② 水毒改善(利水)作用は八味丸のほうが強い
- ③ 気道への作用・痰を除く作用は人参養栄湯のほうが強い
- ④ 温める作用は八味丸のほうが強い
- ⑤ 抗老化作用は八味丸のほうが強い

といえるだろう。

何といても、八味丸の「地黄8g」は強力である。地黄は補腎の生薬である。腎という臓の作用が成長・発育・生殖・抗老化である以上、ここにパンチの効いた地黄が多量に作用すればどうなるかは、家康の例を思い出せばよいだろう。ちなみに、八味丸は「腎気丸」「八味腎気丸」とも呼ばれている。八味丸がいかに腎に重きを置いた処方かが、名前からもわかるだろう。

まとめると、高齢者を対象とするならば、人参養栄湯はフレイルの改善に良い処方、八味丸は老化そのものに抗う処方、ということになるだろう。後者が若年者にも幅広く使われるのは、補腎の概念が理解できれば難しいことではないだろう。

(完)